

# 特集 『地域とともに』

## 私と地域の関わり

法文学部人文学科教授 藤目 節夫



一家言をもったわが友人に学者と芸者は似ている面があると主張する者がいる。彼の説によれば、学者も芸者もお座敷がかかれば出ていく。ただ学者のお座敷が委員会であるのに芸者のそれは宴会である点が異なるが、いずれも自らがお座敷を主催することがない点では甲乙ないというのである。なるほどうまいことを言うものだと不覚にも感心したが、その際ふと思ったのは、近ごろ大学の地域貢献ということが喧しいが、この場合の貢献というのは芸者的貢献なのだろうかということであった。芸者を私の言葉で言い直すと委員会の学識経験者ということになるのだが、要はお座敷（官制の委員会）の場で専門的知識を披瀝することのみで、真の意味での大学の地域貢献が可能かということである。

多様な専門分野があるので断定的なことは言えないが、自らが中心となりお座敷を設けなければ真の意味の地域貢献にならない場合もかなりあるのではなかろうか。私に関わっている「地

域づくり」などはこの典型的な例である。ところが、この地域づくりで従来行われてきたことは、官制の委員会を作り東京・大阪のコンサルタントにプランを描かせ、それを委員会が承認するのが大半であった。地域づくりの主体であり同時に客体である地域住民が、積極的に関与する場がほとんどないこのやり方は、地域づくりの基本的視点が欠けているのではないかと強く感じた。しかし一方で、地域づくりに関して住民の意識も専門的知識も充分ではないとも感じた。私が象牙の塔の中から軸足を多少地域に移すようになったのはこのような経緯からである。

「地域を見る力・考える力・計画する力」を地域住民自らが持とうを合い言葉に、民・官・学からなる「えひめ地域環境研究会：通称REE」を設立したのは今から6年前である。景観・産業・交通・水などの分科会を作り、各分科会が月1回程度の研究会を開催し、毎年100ページ程度の研究報告書を刊行してきた。街角に出て景観の調査を共同でしたり、マイクロバスを利用して著名な町づくりがなされている町へ視察に出かけたりもした。もちろん私の指導学生も参加させた。また、年一回主要なテーマを選び、一般参加も呼びかけて缶ビール片手に「ほろ酔いシン



【所属】人文学科人間科学講座講座 【電子メールアドレス】 fujime@ll.ehime-u.ac.jp  
 【学歴】1969年3月愛媛大学工学部土木工学科卒業 【学位】1977年3月理学博士(東京教育大学) 【所属学会】日本地理学会、人文地理学会、日本都市学会、日本都市計画学会、地理科学学会 【専門分野】交通地理学 【主な研究テーマ】交通流動指標による結節地域構造の解明、交通変革に伴う交通条件変化の定量分析、交通変革に伴う地域インパクト分析

ポ」も実施してきた。そこでは多様な市民との出会いがあり、ときに感動しときに教えられもした。また最近、来るべき21世紀の「文化の時代」を見据えて、地域の文化を地域住民と大学が一緒に考え、それを町づくりに生かす「愛媛地域・文化戦略研究会」を文系教官の有志と結成した。

私の専門のみならず、多くの学問は何らかの形で地域と関わっており、研究者はそれをネタに論文を書く場合がかなりある。しかし、地域の抱える問題は論文を書くだけでは解決しない部分も多く存在することも事実である。こ

れまで我々の多くはよき大学人であろうと努め、そしてそれは基本的には地域との関わりを前提とはしなかった。むしろ地域と関わり時間をとられることは、業績主義にとりマイナスであると認識される場合すらあった。お座敷に学識経験者として参加することには熱心でも、地域住民を巻き込んだ息の長い地域づくりには消極的な態度をとる人もまま見られた。しかし、地域が本当に大学を必要とするようになりつつあるこれからの時代に、地域のこの熱いニーズに応えられない大学は「地域に根ざした大学」を標榜する資格がなくなるのではないかと個人的に思っている。

## 愛媛大学開学50周年記念講演会のお知らせ

日時 平成11年11月11日(木) 午前11時から

会場 愛媛県県民文化会館メインホール

### 講師 早坂 暁 氏

#### プロフィール

昭和4年8月11日生。愛媛県北条市出身。

旧制松山中学校、海軍兵学校、旧制松山高校を経て、日本大学芸術学部演劇科卒。

小説家、脚本家、演出家。

芸術選奨文部大臣賞、放送文化賞、新田次郎文学賞、講談社エッセイ賞、モンテカルロ祭脚本賞、芸術祭賞、紫綬褒賞など受賞

代表作は、

テレビ：「夢千代日記」「天下御免」「花へんろ」「事件シリーズ」

映画：「天国の駅」「ダウタウンヒーローズ」「空海」「夏少女」

小説：「ダウタウンヒーローズ」「日本ルイ16世伝」

舞台：「天下御免」「好色一代男」「空想家族」「夢千代日記」など(いずれも作・演出)多数。